

追悼文

不世出のストライカーが生まれた理由



「釜本邦茂はいつも釜本邦茂だった」

観客としてそのプレーに魅せられ、やがて取材者として間近で、その凄さに触れた。長年、日本サッカーを見つめてきジャーナリストが、釜本邦茂が、釜本邦茂たる所以を綴る――。

文◎大住良之(サッカージャーナリスト)

いきなりハットトリック

釜本邦茂のプレーを実際に見たのはいつだっただろうか――。振り返ってみると、それは1967年の日本サッカーリーグ(JSL)東西対抗。9月8日に東京・国立競技場で行われた第2戦だった。当時私は高校1年生。サッカーを始めてちょうど1年たったころだった。東京で行われる夜のイベントに1人で行くのはまだハードルが高かった。その日観戦することができたのは、同級生が父親と一緒に見に行くこと聞いたからだだった。

初めての国立競技場、初めてのナイター試合。年に一度の張り替えが完了したばかりのピッチが、明るい照明のなかに緑美しく輝いていた。そして試合は「西軍」の圧勝だった。スコアは6-2。釜本は4本のシュートを放ち、3ゴールを決めた。最後のゴールは、右サイドの角度のないところからの弾丸ライナーだった。それからいったい、何試合、釜本のプレーをスタジアムで見えてきただろうか。大学時代から日本代表やヤンマーの試合が関東であると欠かさず見るようになり、大学を卒業すると『サッカーマガジン』の編集者となって仕事としてサッカーの試合を取材するようになってからも、ヤンマーが東京にくると仕事があるなしにかかわらずスタジアムに駆けつけた。1971年には、三ツ沢球技場で行われた日本鋼管との試合で、釜本の驚くべきシュートを目撃した。相手のボールを奪ってターンし、次のステップで30センチ近い左足シュートを叩き込んだのだ。それはまさに「弾丸」と言うべき驚異的な速度だった。ボールはGKの肩口あたりを通過し

著者プロフィール
一橋大在学中に『サッカーマガジン』の編集に携わり、1974年に入社。78年から82年まで編集長を務めた。88年よりフリーランスとして活動中



▲上/メキシコ五輪の高地対策のため標高1800メートルの長野県入笠山で高地トレーニングを行った日本代表。八重樫主将とともに練習に向かう釜本
▲下/1964年3月の東南アジア遠征でチャンスを掴み、代表常連となった

釜本邦茂 主な経歴

1944	4月	15日、京都市右京区、太秦に生まれる
1951	4月	京都市立太秦小学校に入学
1957	4月	京都市立峰ヶ岡中学校に入学
1960	4月	京都府立山城高校に入学
	10月	熊本国体で優勝、アジア・ユース代表に選ばれたが辞退
1962	4月	山城高3年、ユース代表で初の海外遠征
	4月	早稲田大商学部に入学、ユース代表でマラヤ遠征
1963	11月	関東大学リーグで全勝優勝、11点で得点王に
	12月	東西大学王座決定戦に勝ち、大学日本一
	1月	第43回天皇杯で優勝(早稲田大1年)
1964	3月	日本代表入り、東南アジア遠征
	7月	日本代表でインド、欧州遠征
	10月	東京五輪に出場、アルゼンチンを破りベスト8に進出
		関東大学リーグで2位、7得点で得点王に
1965	3月	日本代表、東南アジア遠征
	12月	関東大学リーグで全勝優勝、3年連続得点王に
		東西大学王座決定戦に勝ち、大学日本一
1966	7月	日本代表、欧州遠征、W杯イングランド大会見学
	11月	関東大学リーグ優勝(中央大と同時)、4年連続得点王に
	12月	第5回アジア大会で日本3位。第15回全国大学選手権で優勝
1967	1月	第46回天皇杯で優勝(早稲田大4年)
	3月	66年度年間最優秀選手に選ばれる
	4月	ヤンマーディーゼル入社、日本リーグデビュー
	9月	メキシコ五輪予選に出場
	1月	西ドイツ・ザールブリュッケンに留学(2カ月)
1968	10月	メキシコ五輪で銅メダルを獲得、7点で得点王に輝く
	12月	ヤンマー、JSL2位。14点で得点王に
	1月	第48回天皇杯で優勝
1969	3月	2度目の年間最優秀選手(68年度)
	6月	ウイルス性肝炎で入院。W杯予選欠場
	11月	ヤンマー、JSL5位
	11月	ヤンマー、4位。16得点で得点王に
1970	12月	第6回アジア大会、日本は4位
	1月	第50回天皇杯で優勝
1971	9月	ミュンヘン五輪予選、日本は敗退
	12月	ヤンマー、JSL初優勝。11点で得点王に
1972	3月	71年度年間最優秀選手(3度目)
	7月	ムルデカ大会、15得点で最優秀選手
	11月	ヤンマー、JSL2位
1973	5月	西ドイツW杯予選、日本は敗退
	12月	ヤンマー、JSL3位
1974	7月	欧州遠征、ワールドカップ・西ドイツ大会観戦
	9月	第7回アジア大会、日本は予選敗退
	10月	20日、対三菱戦でリーグ通算100ゴール達成
	12月	ヤンマー、JSL優勝。21点で得点王に
1975	1月	第54回天皇杯で優勝。リーグと初の二冠達成
	3月	年間最優秀選手(4度目)
	7月	ムルデカ大会、日本4位
	12月	ヤンマー、JSL連覇。17点で得点王&6点でアシスト王に
1976	3月	モントリオール五輪予選、韓国戦で敗退
	3月	2年連続の年間最優秀選手(5度目)
	6月	タイのクイーンズ・カップでヤンマー優勝
	8月	ムルデカ大会、日本13年ぶりの2位
1977	2月	ヤンマー、JSL4位。15点で得点王に(3年連続)
	3月	アルゼンチンW杯予選、日本は敗退
	6月	第6回日韓定期戦をもって日本代表を引退
	9月	最後の代表活動としてベレの引退試合に参加
	15日	対三菱戦でリーグ通算150ゴール達成
	1月	ヤンマー、JSL5位
1978	2月	ヤンマーのプレイングマネージャーに就任
	11月	ヤンマー、JSLで2位。15点で7度目の得点王に
1979	12月	ヤンマー、JSL4位
	9月	リーグ200試合出場を達成
1980	10月	監督就任3年目でリーグ(JSL)初優勝
	12月	ユニセフ・チャリティ試合に世界選抜で出場
	3月	年間最優秀選手(6度目)
1981	1日	対日本戦でリーグ通算200ゴール達成
	ヤンマー、JSLで4位	
1982	15日	対日立戦でリーグ最後の得点(202点目)
	20日	対マツダ戦でアキレス腱を断裂
	8月	2度目のアキレス腱断裂
	10月	ヤンマー、JSLで2位
1983	11月	1年6ヵ月ぶりにリーグ戦出場
	ヤンマー、JSL5位	
1984	1月	1日、天皇杯決勝、日産戦に出場。現役最後のプレー
	2月	13日、現役引退を発表
	8月	25日、国立競技場で引退試合を開催
	11月	ヤンマー、JSL9位
1985	2月	ヤンマーの監督を辞任
1986		釜本フットボールクラブ設立
87-90		全国各地でサッカー教室を実施
1991	8月	松下電器(のちのガンバ大阪)の監督に就任
1992	9月	ナビスコカップは8位
1993	5月	Jリーグ開幕。ガンバ大阪は1stは8位、2ndは6位
1994		シーズン限りの監督退任が決定
		ガンバ大阪は1stも2ndも10位
1995	7月	参院選に出馬し、当選
1998	7月	JFA副会長に就任
1999		JFAの2002年強化推進本部長
2000	7月	労働政務次官就任のため強化推進本部長を辞任
2001	7月	参院選に出馬するも落選
2004	7月	JFA副会長に復帰
2005	4月	第1回日本サッカー殿堂に選出
2008	7月	JFA副会長を退任し、名誉副会長に(10年より顧問)
2014		旭日中綬章受章
2025	8月	10日、大阪府内の病院で肺炎のため死去。享年81歳

彼が自分自身のプレーを完成させ、世界的なストライカーとなったのは、1968年初頭、西ドイツのザール

身体よりも精神と頭脳

資質に恵まれていたことに疑念はない。JSLの登録では一貫して1

果生

つもの「個人鍛錬」のエピソードがある。通学の電車で通過駅の駅名を読み取って「動体視力」を鍛えたという話、左足のキックを磨くために箸を左手に持って食事していたという話、そして、新宿の雑踏の中で走るようなスピードで人をかわしながら歩いていたという話……。

早稲田大学時代にも、彼にはいくつもの「個人鍛錬」のエピソードがある。通学の電車で通過駅の駅名を読み取って「動体視力」を鍛えたという話、左足のキックを磨くために箸を左手に持って食事していたという話、そして、新宿の雑踏の中で走るようなスピードで人をかわしながら歩いていたという話……。

れを磨いたのは蜂ヶ丘中時代以来の「個人練習」だった。中学生時代、登下校の道では、石ころを蹴って通った。小さな石を思いどおりの方向に蹴るには、正確に中心を蹴らなければならない。クツに穴が開いても、釜本はそれを毎日飽きもせず続けた。ボールの中心を蹴り抜くキック力の原点である。風呂場も釜本の「練習場」だった。湯船のなかでキックをしてみたら、すごい抵抗だった。筋力の強化になると、また毎日続けた。

「前人未到」どころではない2000ゴール。第15節の相手は、ブラジル・パワーで4連勝と絶好調の本田だったが、釜本の前では哀れな引き立て役でしかなかった。0-1で迎



▲1968年のメキシコ五輪に臨んだ日本代表のメンバー。釜本は前列左から4人目

たはずだが、GKはボールがネットに突き刺さってから形ばかりの「セービング」を見せた。釜本はいつも釜本だった。圧倒的な存在感で日本代表やヤンマーの攻撃の先頭に立ち、ボールを受け、相手DFなど存在しないかのようにシュートを決めた。何よりもすごかったのは、スタンドから見ている「チヤンスー」と感じたときには釜本のシュートが確実にゴールの枠をとらえ、GKが奇跡的セービングを見せなければ高い確率でゴールになっていたことだった。

2位を引き離すゴール数

2位を引き離すゴール数

特に私がすごいと感じたのは、1981年後期のJSLだった。釜本37歳のときである。後期初戦、第10節のマツダ戦で2得点を記録。続く第11節のフジタ戦では強烈なシュートがバーを叩いて真下に落下、ゴールは認められなかった(釜本は執拗にゴールを主張したので、実際には入っていたのかもしれない)ものの、翌第12節からゴールラッシュが再開する。

199に伸ばしたのである。ちなみに、27シーズン行われたJSLの通算得点トップはもちろん釜本の202ゴールだが、2位は碓井博行(日立)の85ゴール(11シーズン、200試合)である。「前人未到」どころではない2000ゴール。第15節の相手は、ブラジル・パワーで4連勝と絶好調の本田だったが、釜本の前では哀れな引き立て役でしかなかった。0-1で迎

えた前半34分、左サイドのMF楚輪博のパスを受けた釜本がワンストップして左足を振り抜くと、ボールはわずかに本田のDF熊谷義一の足に触れてゴール右隅に決まった。85分にはヘディングで4-1とするゴールを決め、一挙に「200」を通過してしまったのである。

「得点」の記録ばかりが有名で、あまり知られていないが、釜本は「アシスト」でもJSL通算トップの79回という記録を持っている(2位は永井良和と古河の77)。

釜本がヤンマーでプレーした1967年から83年の17シーズン、ヤンマーはJSLで282試合を戦い、529得点を挙げた。そのうち202得点(38・2%)は釜本自身の得点だが、これに79アシストを加えると281点になり、全体の53・1%という高い割合になる。アキレス腱断裂でシーズンの半分を欠場した1982年と、ほとんど出場できなかった最後のシーズン、1983年の記録を入れての数字である。

「得点+アシスト」を「得点関与率」とすると、釜本はこの時代のヤンマーの得点の半数以上に直接・間接に関与していたことになる。「関与率」が最高を記録したのは1970年のシーズンで、チームの総得点26のうち16点(得点率61・5%)を挙げ、4アシストを記録、実にチームの総得点の4分の3を超す20ゴールを釜本が生み出していった。

だが釜本を記録だけで語ることは本意ではない。右足だけでなく左足からも繰り出されたあのシュートのパワー・スピード・精度は、どこから生まれたもののだろうか――。

79歳とされていた身長も、賀川浩(※編集部注◎ジャーナリスト)によれば「実際には182〜3センチ」であったという。

上半身の骨格が非常に大きく、どんな相手でもはね返す力を持っていた。そして何より、太ももの前面、「大腿四頭筋」の太さである。その中でも「内側広筋」と呼ばれるひざ上内側の筋肉の発達度は、ギリシャ彫刻のヘラクレス像を思わせた。

瞬間的なスピードでは杉山隆一に及ばなかったが、数歩走るとスピードに乗り、欧州の代表クラスのDFも置き去りにすることができた。そのスプリントのフォームは、流れるように美しかった。

だが、釜本邦茂を「不世出のストライカー」にした要素は、こうした肉体的資質ではない。90%以上は、その「精神」と「頭脳」にあった。

どんな競争にも勝ちたいという勝利への執着。勝つためにどうしたらいいかという考察。そのための工夫、「ゴールを決めるのが自分の役割」

出会いと鍛錬で大きく成長

釜本邦茂は1944年4月15日に京都市の右京区の大秦(うずまさ)で誕生した。4人兄弟の末っ子で、父・正作は元警察官で剣道の名手、母ヨシエは陸上の短距離選手でオリンピック代表候補だったという。恵まれた資質の持ち主であったことに疑いはない。

少年時代の遊び場は近くの広隆寺だった。国宝の「弥勒菩薩半跏思惟像」で知られる古刹である。京都市立太秦小学校のときにサッカーと出会う。この学校が「夏は野球、冬はサッカー」を校技としていたため、自然にボールを蹴るようになったのである。しかしただボールの回りに密集するプレーに興味を持てず、当時から人気のあったプロ野球の選手に憧れていたという。

大きな転機を与えたのは、同じ小学校の教師・池田輝也のひと言だった。池田は教員チームの京都紫光クラブでプレーするサッカー選手でもあったが、釜本の担任というわけではなかった。

1957年3月、釜本は小学校を卒業し、中学進学を待ちながら仲間たちと小学校の校庭で遊んでいた。そこに声をかけてきたのが池田だった。中学では野球部に入るという釜本に、池田はこう言った。

「サッカーなら、オリンピックにも行けるし、世界の国を回れる。野球なら、せいぜいアメリカだ」

その言葉で、釜本は蜂ヶ丘中でサッカー部に入ることを決意する。小学生のときから脚力を生かしたキックのパワーには定評があったが、そ



▲67年にヤンマーに加わるとすぐに主軸を担った。杉山隆一擁する三菱重工との一戦は黄金カードになった

と割り切り、そのための練習に集中できる強さ(彼は毎日百本のシュートを打ったと語っている)、そして何より、自分に課せられた期待を受け止め、どんなに厳しい状況にあってもその責任から逃げなかった。

「第二の釜本」を生み出そうと、日本のサッカー界は長身選手を見つけては技術を教え込んできた。しかし何十年かけても成功していない。身体的資質よりも、釜本のような「精神」と「頭脳」面での資質に、もっと目を向けるべきなのではないか。日本のどこかに、そうした資質を受け継ぐ少年がいるはずだ。